特42
850

205272-000-6

特42-850

天一坊物語（実説双紙）

隅田園　春暁／編

M17

EDV-0333

天一坊物語序

建長のむかし青砥左衛門尉藤綱い鎌倉北條執權の廳に裁決の雷名を轟し大岡越前守忠相い徳川幕府の名奉行と稱せられぬ誠や侯が一世の名斷擧て數ふるに遑あらず中よも天一坊法澤が裁斷の如きい柳鶸鵡を隱して其塵外に顯と眺み先人も言ひ其姿の判然たらぬよ困難されしとかや抑法澤下賤の身にして德川將軍の血統と犯さんとの大仕懸木を以て竹よ接に等しく鷺を鴉と云黒むれど大岡が活眼にて視時い黒白瞭然たらざらんや近頃朝日の昇る勢を得て千里に羽を延す鶴聲社大人が千歳迄變らぬ實傳を綴りてよとの一聲よ米小雀の春曉が青口走ゐ囀しを余も又片紙の序を記すもの也

竹亭綠水誌

實説 双紙 天一坊物語

東京 隅田園春曉編輯

○第一回

幾日も續て降る雪に往來途絶て物淋しき和歌山在なる平澤村軒端傾く草の家の隣い遠く離ゝ里老朽果し身一ッに便なく月日を過すある老婆お三が雪風の寒さ凌に落葉焚煙も薄き襤褸衣車にかけて繰糸の細き命を漸々に繋ぐもいぶせき風情あり係る折しも雪踏分て突かい來る小坊主が婆ァ樣宅に在すかと音信つゝも破扉を押明這入婆をお三い見やり誰ぞと思へバ法澤どの此雪の日に遑急と來つるい急の用事ばし有てのとかと問懸れバ法澤頭上を左右に振否とよ我輩が來つるのい今日謀らずも壇家にて志しの法事ありとてお師匠樣が招に預り馳走にありし其上に精進料理の裘染もの多く貰ふて戻られしが半を分ちて食せよと我輩へ是を賜りしが此大雪に誰あつて訪ふ者も稀よし有バ一人寂しく在すらめせめてい其節よ與へもして老の憂と慰んと些の酒を師に乞ひ請て裘染と共に持參れり遠慮あく飲食して老木を裘ひ賜ひねと酒の德利に小包と添て老婆が前に出せバ其深切の眞心とお三い嬉しみ謝しつゝも今に初めぬ其方の深情忘れい置じ忝なしと爐ゐ枯枝を折焚てサァ〳〵手足を煖られよと時よ臨ての馳走ぶり法澤爐端に座と占て焚火に手をバ指かざし器い我輩が持歸らん食し給へと勸れバお三の喜祝限りなく茶釜に德利差入て煖酒の心地よく舌打鳴して飲居けるが何思ひけん法澤の顏打見やりてお三婆ァい眼胞にうるむ感涙を止め兼たる愁ひの体法澤更に合點ゆかねバ何故ありて悲しみたゞふぞ苦からずバ其子

細語り聞して給へれと膝立直して問ひ懇れば老婆へ涙おし拭ひその不審へ無理あらず私が涙と催せしへ指折算ゑて思ひ見れば十年余り五年を過にし跡の物語云も涙の種あれど言ねば其方が疑ひの念さへ晴ねば一通り聞て下され法澤殿私が娘にお澤とて眉目容貌さへ尋常の人に勝りし者有しが十七歳の秋ありさは領主様の重役たる伊東將監殿と言ひ玉ふが家へ奉公致させしに彼お家にお成長ありし大主の若君徳太郎様とか言ふは方の御意に叶ひて浴室よりお情受しへ上もあり其身の冥加恐まで宿し参らせ五月の岩田帯さへ人目を厭ふへ未部屋住の君故に晴て親子の御名乗の成時速く來ねかしとろの御立身を祈りつゝ待甲斐有しが儘成ぬへ疾九ケ月の其年に徳太郎君へは分家の右京様へ移らるゝ其際澤と密お招ぎ不便あがらも其方を伴ふ譯おへ成難し後の証據に此二品汝へ遣すありと短刀お書附添て賜りおん別れ申せしが娘へ懐妊にて奉公あらぬ暇を願ふて家お返り間も無く産の紐解て出生在しへは男子故娘も私も喜悦し其甲斐もなく七夜と過てはは運果敢世を去たまひ娘お澤も産後の氣病が原とあり母子諸共冥府の客逆回向の年月を算て見れば十五年孫が無事よて成

長しあらば丁度其方と同年顔容まで瓜二ツ似たる姿に遂引て思ひ出して涙に昏しへ老の愚痴許して下され法澤殿と恥らふ体よ法澤へ始めて聞し憐れお話し其へ傷しさと成さと便なき老婆が心根を思ひ遣て忙然たりしが何思けん法澤へお三に對ひ夫へ亦果敢とあがら證據に得たる二品へ其後如何成仕ぞと問れて老婆答る様其二品へ今に猶人にも語らず秘置たり余人と異ある其方故拝見爲して進ずべしと粱に釣せし澁紙の包下して解披き中より取出す短刀へ裝散しの金造り邊り晃き一品お書附添て法澤が膝の傍

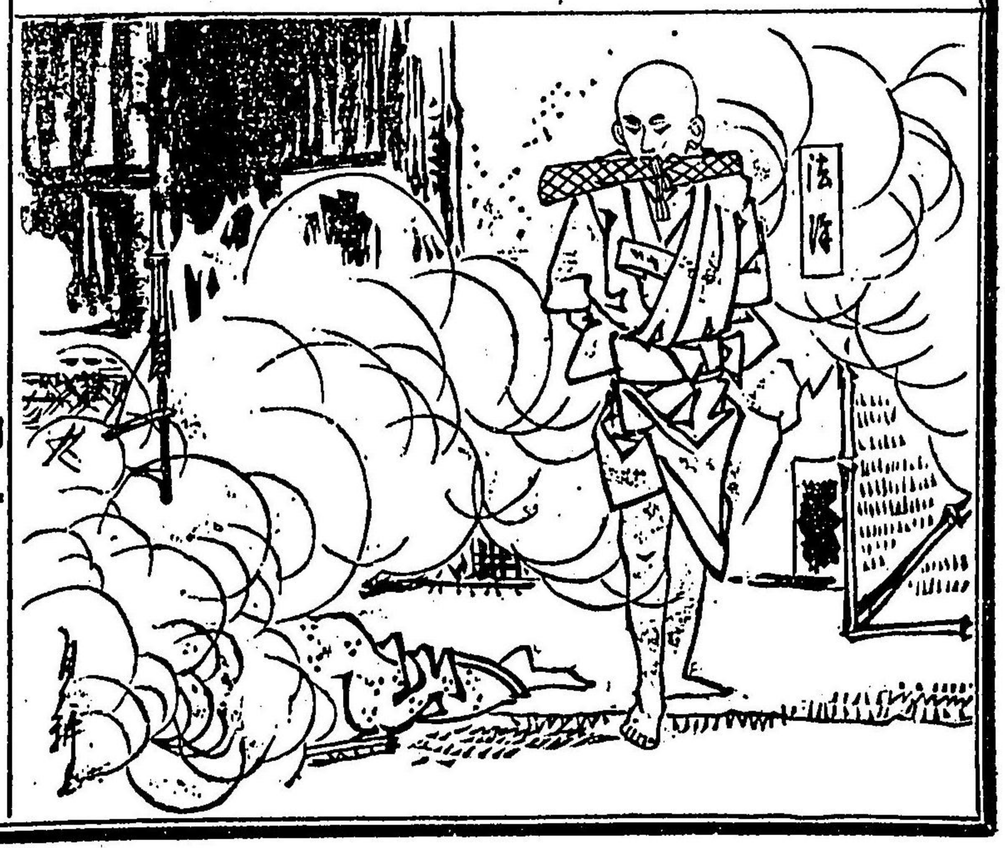
に並ぶれば法澤熟々打見やり彼書付を讀下せば

證

一其方腰妊之義覺有之女子あれば苦しからず男子あれば出産の後届々出べし　寶永元年八月廿五日　德太郎印　澤野井へと記し有りるゝぞ法澤讀畢てポット太息つき偖て先日關東へ下向ありて八代の將軍職に成せ給ひし彼君の伊東の家に成長在し德太郎君にて在せしか斯した證據の有上の味く行べ此上なき出世と忽然發る懇心を包まて二品大切に秘置たまへと差戻せば老婆の何の氣も着ず以前の如く取調再度梁へぞ結着ける

○第二回

法澤意中に一物あれば態とお三に酒を勸め五合餘りの酒德利空しく成し程あればお三の甚く熟醉して爐の傍に打臥つゝ前後も知らず高鼾眠法澤夫と見るよりも仕濟たりと一人り笑して立上りつゝ細引取出し手早く老婆が首筋へ二ッ三ッ廻し力ゑ任しウンと縊れば何かの以て堪るべき熟醉あせし上あれば息絶てこそ死してけれ法澤頓て其死骸を爐の中へ押轉し木の葉枯枝多く爬入火を轉徙彼二品の證據物を奪ふて師匠の家ゑ戻り何喰ぬ体に在しかば翌日お三が酒ゑ醉爐に落入て燒死したりとの噂ゑすれど誰一人法澤が所業と云絶て知る者有ざり々り法澤の猶深く巧己が出所を隱んと師の觀應院を毒殺し下男久助と獄さつゝ師の貯ゑへし二百兩の金を掠て懷へ匿せしと云露ゑらず日頃素直ゑ法澤故是非觀應院の亡跡を繼れよかしと村人の勸むる語も大望の有身成せば兩三年修顯の道を修行して再び歸國爲べしと語を飾り僞りつゝ夜明ぬ内に村を立退濱邊で犬に取捲



れ追散さんと揮まはす棒の撥ゐ一疋の犬を其處にて打斃せしと是幸ひと衣類を切裂犬の血を笠其他の物ゐ迄塗付盗賊に殺害されし体あつくろひ伊勢參りと姿を替て住馴し紀伊路と跡に涙花瀉四國九州中國と心太くも悪事を働き何方と的と定めあき身の尾張路の山中にて赤川藤井の荷擔人を得ッ巣が勸めに打連立美濃の國へ至り長法羅村に七字の妙号尊くも石牌立し法花寺常樂院に着しその門外に森砂手桶うづたかく積重ねたる正面ゐ徳川天一殿ゐ旅宿と然も敬恐しく記したる高標立て紫の由緒の色の晃くも葵の紋を染出せし幔幕左右に引廻し威儀堂々たる玄關先ゑ一人の涙士案内を乞ふて一ト間に通をゞ住僧天忠立出で是ゐ先生にゐ能こそ入來たまひしぞと禮義も厚く敬へゞ涙士も仕侶の無事を祝して我輩貴僧へ御意と得て伺ひ度と有て態々當寺へ來りしゐ此頃當寺ゑ在すと聞く天一坊とかヤすゐ方如何なる深しき故有て貴僧ゐ守護せらるゝや其趣意更に知る由あけれゞ聞ま欲しと問ひ懸れゞ天忠然こそと點頭つゝ彼天一坊殿とヤす公ゐ過し寶永三年秋ゆりしが此門前に一人の旅の婦人が癪の腦に堪難く苦痛の体と先代の住職日忠が不便ゐ思ひ門内へ入て介抱致せしが針灸藥治の効もあく婦人ゐ遂ゐ死去跡に當才の子を殘せしと貰ひ乳して育あげ母の菩提の爲に徒弟と爲ッ天一と号て現今迄置つるが實ゐ當將軍吉宗公の淫落胤と云事ゐ墨附と短刀の證據の二品有しに依り先代日忠の遺言もあり頓にも親子淫對顔を取斗ふべき筈成しかど思ふゐ任せぬ故ありて延引ゐせしが據め支度も屆きしかゞ近日東へ淫供成ん愚僧が心得貴所も仕官のお望あらゞ拙僧推舉致すべし淫存意何奈ゐと勸むれゞ涙士ゐ始終うち聞て夫ゐ添あき幸ひあれど少しく思ふ子細あれゞ天一殿の尊顔

を拜して後に顧ふべしと心あり氣の一言よ然らば兎よ角奥殿へいざ參られよと天忠い前あ立てゞ案内なしぬ

○第三回

浪士山内伊賀之輔い天忠の背後に從ひ天一坊殿の御前近く至りけるを天忠斯と言上あせしに天一坊い上段より遙に見やりて山内伊賀之輔と言るい其方よあ予い天一あて在ぞかしと左も横柄あ演けれゞ山内い敬禮厚くあしつゝも天一坊の人相を熟々觀やり居たりしが大口開て打笑ひ天忠坊の言葉の端々且い又當將軍の御落胤が係る草深き山寺に年久しく在せられしい何とも以て不審のとよと思ふに違はぬ偽者之余人い知らず此山内が活眼を以て見貫しからい你等如き長舌に欺れんやと目當の的の星を指れて天忠始め赤川藤井等顔見合せ偖い大事を見貫れしか此上い捨おき難しと赤川が慍發荒く立上るをヤレ待れよと天一坊制し止めて上段より徐々下りて山内の手を捕上座に押直し斯博學の御仁と知らで欺んとせしい我過失偽者と見貫をて陰謀露顯ふすからい兎ても鎖の叶いざる光とこそい覺へたれ我

首刎て荷擔人の助命を計ひ賜れと首指延て覺悟の体に山内い其大膽を大いあ感じ我幼年の頃より雲上方の名家に仕え雑掌役をも勤めしあれば和漢の書籍に眼とさらし觀相の道をも學び得たり因て其許の相形を觀る所顔中に殺罰顯れ落胤とい思いれず正しく下賤の者あるべしと見認し故難じたりしに眞實を明さるゝ上からい羽翼とあり一臂の力と貸ヤさんと思ふに變りし山内が詞に天一蘇生の心地なし實い我等い法澤とて斯〳〵云々の身の上なれと茲に證據二品あり何卒此上先生のお指圖受て爲す時い大望成就

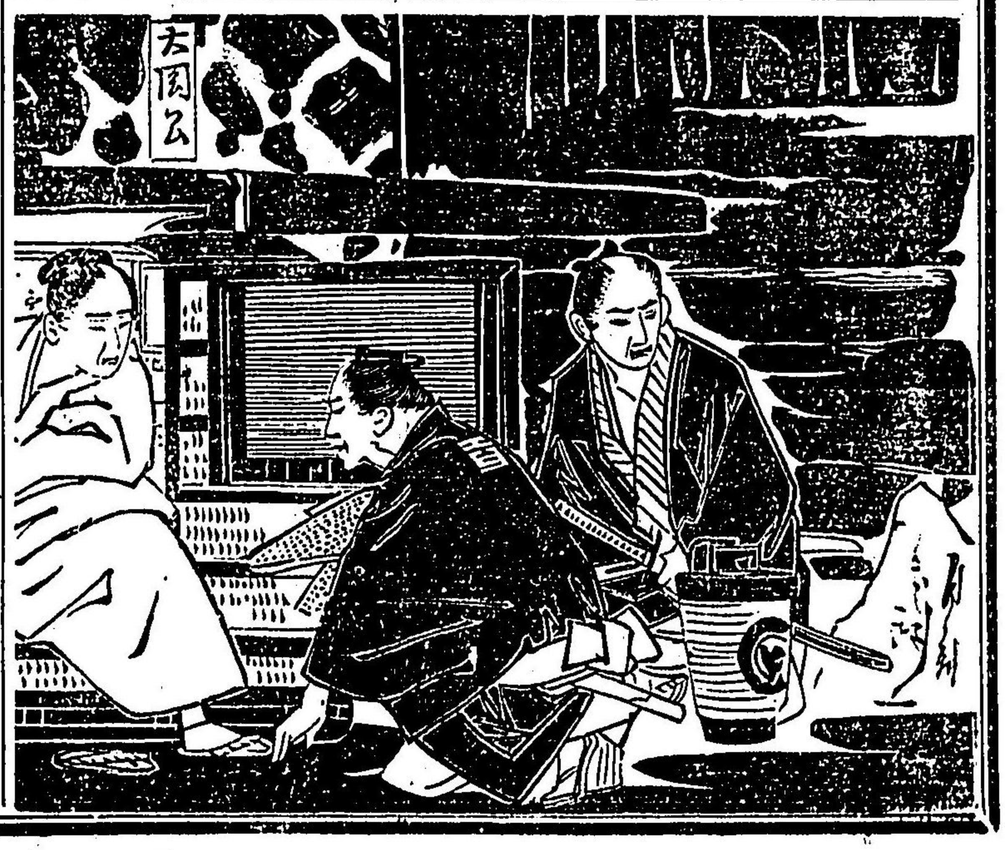
疑ひあらじ是迄仕組し企の本懷遂させ賜はれと赤川藤井天忠等も倶に言葉を揃へつゝ袖にすがりて頼み入心の中を不便と思ひ山内い一同の者ゑ對ひ當時江戸表にい名奉行と噂の高き大岡越前守忠相と言る賢士あれバ万に一ッも成難しとい思へども運を天に任せ命を的に謀りて見ん各々今より覺悟して我等の差圖に從ひ玉ひ東下りの伍用意あれとて遂に惡事と知りながら法澤はじめ其他の者にも謀釋師と仰れて東下りの用意万端山内伊賀之輔が指圖あして謀らひ遂に大名も及バぬ行粧にて江戸へ下り其筋の役人に附て申し出けれバ雖ども天一坊を偽者と咎め疑ふ者あきい證據とすべき二品の正しく將軍吉宗公の伍手づから下し賜りし品故なり然れバ老中はじ先諸役人衆議の上吉宗公へ上聞に達しけれバ將軍家も殊更伍喜悦不斜一日も疾く對顔せんと待わび賜ふ程あるバ天一坊い山内の斗ひにより成就近きに至りしと其功を賞感し常樂院天忠赤川大膳藤井左京等も大望既に成就したる心地爲しつゝ伍親子伍對面の伍沙汰遲しと八ッ山の旅館に在りて待にけり爰にまた將軍吉宗公の伍召ゑ應じ伊勢山田奉行より轉じて三千石を賜りし大岡越前守忠相い江戸町奉行に登用せられけるバ仁政を以て民を憐み假初よも依怙自儘の裁判と爲ざるにより市中擧つて名奉行と賞する程の君あれバ此度天一坊と云る當將軍家の伍落胤東へ下向して伍親子伍對顔を乞んとする由聞とひとしく其樣子を尋るに美濃の國長保羅村ある常樂院にて伍成長との事なれ共吉宗公の仰らるゝゑい婢女澤野井といへるい紀州の者なる由如何あして美濃路に漂流行たるゑや亦常樂院にて伍落胤と知りながら己が徒弟として廿の年月過つる迄陰し置しい不審あらずや仮令證據の二品を所持爲すとても天下のため一度

我思ふ所の不審の條々糺問したる其上にて正しくば落胤に紛れなければ親子對顔と取斗ふても苦しからずと忠義を思ふ眞心より八ッ山の旅館へ使者を走らせ役邸へ天一坊を招しろの顔色を觀るに將軍家の胤落胤に似合しからぬ殺伐の相あらはれしい心得難しと思しが其日い概略の事情を糺問ありし而已にして天一坊い無恙八ッ山さして歸館なしたり

○第四回

大岡越前守い天一坊の相形賤しく殊ょ殺伐のさざし有るれば證據の品のみ實にして將軍家を欺き出世を望む者ょて有んも計り難し嚴重に其來由を糺問して眞僞の程を明瞭にあすいい天下の胤爲と思いれけるにぞ將軍家へ委細を言上しば許容を乞得て腹心ある吉田三五郎を使者となし天一坂殿の胤身分ば尋ヤすべき次第有之に付明八ッ時役邸へ出らるべしと左も横柄ふヤ送りしかば赤川藤井等その無禮を憤りけると山内い斯あらんと豫て期したるとありせば渠等を制し止め明日い一大事あり先方にて奈何成無禮過言を爲すとも必ず憤りを發すべからず怒を起さば大望の破れと成べし若つて我語に叛くと勿れと堅く制し猶種々の

密談ふ時刻を移して眠ょ着しが翌日未明に赤川大膳い山内の下知に從ひ大岡公の役邸へ赴きけるょ山内の語ょ違わず無禮沙汰の限りあれども大膳能く是と忍び堪て山内の來ると遲しと待所へ山内伊賀之輔天一坊を供奉して入來れば大岡忠相天一坊へ對し不審の條々一二を追て糺問せらるゝ所山内傍に居て逐一明白ふ言開く有樣い左乍水の流るゝに異ならねば流石秀才の忠相も山内が辨才速なりけるを感じ尋ね問べき事も尽たれば是非なく敬ひ尊みて歸しけり將軍吉宗公此由聞し召れ正しく證據ありて下



向せし我子よ疑念とかけ親子の對顔を妨延引爲さしむる條心得難し早々對顔の義取斗ふべき旨老中へ催促ありければ老中方は評議の上大岡忠相へ百日の閉門仰付られ遂よ汚親子對顔の日をぞ定められける大岡忠相是を聞て天下の大事捨置難しと密よ吉田三五郎池田大助白石治右衛門等の腹心と示し合せ夜中葬式の体あもてなし警固の者を欺き忍んで永戸の館よ赴き齊昭公へ一伍一什を言上なしつゝは親子對顔の定日を十日間延期相成樣は取計らひ下され度と願ひければ齊昭公も忠相の誠忠を感じ賜ひは承引ありて忠相よ山邊主税を差添人目を課つて忠相主從を首尾よく其邸内へ送り遣はされたり偖も越前守は天一坊の傍に山内と言る才智勝れし者ありて容易く糺問あし難く殊に證據の品を持て居る故に偽者とは見認しあれども此方に得る所の證あければ詮索の手懸り有ざれば此上は將軍家の汚出所といひお胤を宿し參せし澤野と言る婦人は和歌山在の者と聞ば彼地と詮索に及びあば實否の知るゝ便も有あんと心つけば吉田白石の兩士へ紀州表取調の義を命じたるに兩士は直地に身支度整へ江戸表を發足あしつゝ不日して和歌山へ赴き種詮索を遂られし所伊

東家あて澤野と共に仕へ居たる婦人當時神職の許へ縁付ありけるを傳聞此者の話しより澤野が母お三と言る老婆ある由を知り夫等の事委しく探り彼が菩提寺へ赴き過去帳を調べ見るよ寶永二年澤と言る女の戒名幷に氷子を葬りしと明白に記して在けるゆゑ是ぞ正しく將軍家のお胤に相違無らんと推察してければ住僧お託して佛事供養と營み亦平野村ある觀應院の弟子法澤と言ふ者諸國修行に出たりしが濱邊にて盜賊お殺され身躰は何方へ流れ失しや更よ知れずされど破笠行衣の類は如何して其跡に有しと汚檢視の役人衆が持參られたりと村人の談話詮義の端よも成んかとて郡奉行へ乞ひつゝ不淨庫に蔵め在さる笠行衣を取寄見るよ犬の血を以て汚したる物あれば年月と經るに從ひ人血と異なりて見ゆれば殺害されたる体に繕ひ其跡と陰せしに紛れなしと察しける故猶法澤が年齢を聞糺すに天一坊よ似寄たる故此奴よては無やと大略見込着たれば其面体を見知れる者の在ざりしを遺憾に思ひ兎や角する内十日の日限も疾近附なれば詮義の便に成べき品々取集其を携て紀州を發足なさんと爲夜課らず觀應院の家よ下男奉公をして居たる久助老人に出會し故兩士は喜悦

大方あらぬ直に久助を伴ひ江戸と指てゞ歸りける

○第五回

天綱回會粗にして漏さず何奈で奸曲を罰せ爲らんや八ッ山の旅館にい天一坊幷ゐ赤川藤井の輩斯さで越前守の詮索届ひし事い露知らずは親子御對顔の沙汰有かしと待所へ越前守より使者を以てゆ送りゆるい明日は親子は對顔の取持仕べく間役邸へ汐越在せられ度との事成ゞ一同扱い大望成就の時至ゑりと喜悅中ゑ伊賀之輔ひとり合點もかずと思ひ居しが夜に入て品川の沖中遙に猝火多く焚連ねたるを見て扨い霞顯をあしたるゝと早くも覺れと他の者へい夫と知らさず翌日い已一八ッ山に殘り赤川藤井常樂院等を始め供人數多に天一坊を警衛いたさせ越前守が役邸へ赴のし充其身い心閑ゑ辭世を遺し四十三才を一期として割腹あして相果しい潔白かりし事どもあり斷る事とい露知らて一同勇立行烈正しく大岡の邸へ赴さその体を見るに何時に替り禮を厚くし尊敬あしッ、設の席へ案内するにど一同心を安んじ各々座に着く折から越前守立出て天一坊へ敬禮しつゝ今日汐對顔と定りしに依て昨日使者を以てゆ上し處事故ありて明日と相成しかど再度ゆ上るの暇と得さりし内は越あらせられてゆ譯も無之次第あり豫て汐父君より天一坊殿へ下し賜りし品々忠相は預りゆ置たり只今は受納下さるべしと白木の臺ゐ敬〳〵しく乘たる物を持來り天一坊が前ゐ居たり天一坊い何心なく何奈成品ぞと見てあれゞ血汐ゑ染りし破笠行衣己が覺のこの品々如何あしてと驚く折から遙か彼方の襖の蔭ゐ忍びて伺ふ久助が知らせの咳諸共ゑ待構へさる數多の組子奸族最早退れぬ所繩に懸れと呼いりつゝ矢庭

に四人を縛り上げ其余の者まで召捕せ皆夫々に罪を糺して刑罰せられぬ此由言上に及びけれゞ八代將軍吉宗公甚く驚かせたまひ斯る奸賊を見顯ゝせしい越前守が大功とて其功を賞せられ一万石を賜りしとかや

○松が枝の花にも今い何かせん　忠相
柳の糸のあへて世の中

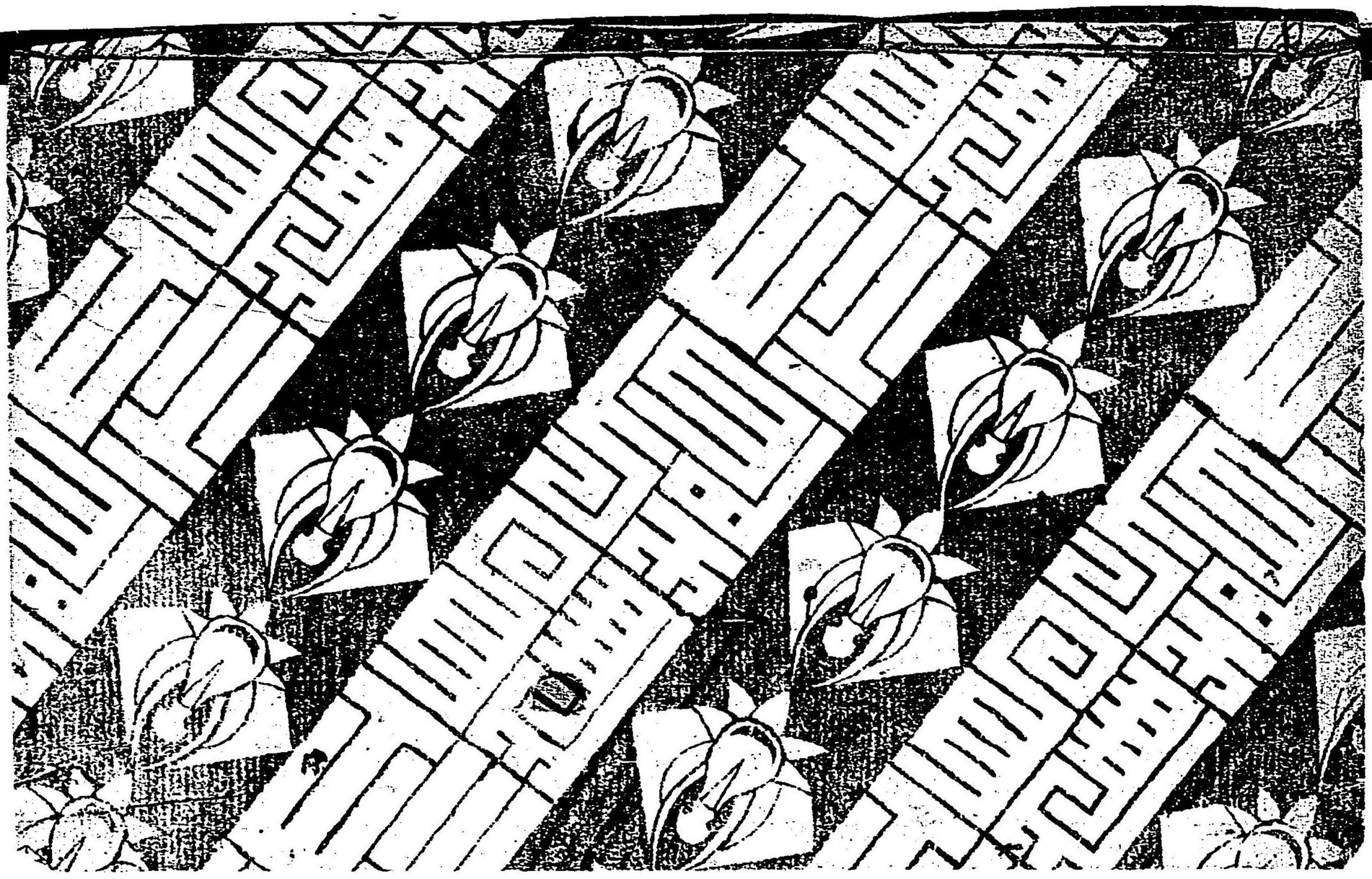
實説双紙天一坊物語終

明治十六年一月廿日御届
東京府平民（定價四錢）
編輯兼出版人　森仙吉
日本橋區横山町
貳丁目十番地

實説双紙出版書目

鶴聲社

一大岡天一坊政談
一同村井長庵政談
一同畔倉重四郎政談
一同越後傳吉政談
同松田於花政談
同永呑村九助政談
伊賀越仇討
一龜山孝子仇討
天下茶屋仇討
白石孝女仇討
塚孝子仇討
鷺遠藤秘録
伊倉義顯勇譽録
佐船越重右衛門物語
佐野次郎右衛門物語
寛永箱崎文庫記
歴安太平記
中山苔代記
名譽紀文一代記
天草大禮記
北雪金澤美談
松前屋五郎兵衛記
宇都宮騒動

一彦左衛門一代記
一氷戸黄門記
皿屋敷怪談
難波大戦記
異田三代記
石山軍記
清臣鎮西軍記
豊正朝鮮軍記
佐賀怪猫傳
日蓮上人御一代記
親鸞上人御一代記
祐天上人御一代記
弘法大師御一代記
中條姫一代記
小野小町一代記
一休諸國物語
魁神於松一代記
尼子十勇士傳
高尾常右衛門物語
毛谷村六助物語
石川五右衛門一代記
高田馬場義士譽記
川中島大戦記

一曾我物語
一爲朝弓勢記
小栗判官一代記
鏡山仇討
鈴木主水物語
お初水物語
半長右衛門物語
於旬傳兵衛物語
國定忠次物記
四ッ谷怪談
阿波鳴戸順禮記
梅川忠兵衛物語
お七吉三物語
お染久松物語
花川戸助六物語
於三茂兵衛物語
三勝半七物語
梅若松若一代記
小野道風一代記
一將門一代記
一木曾義仲一代記
一義經辨慶一代記